



1982-8

No.167

【表紙】

東照宮陽明門

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

## もくじ

### 新羅文化の再認識

「根」の国を求めて

林屋辰三郎 4

### 随想日本の染織の技術と心

北村 哲郎 7

宗教の語義について

竹村 牧男 10

報告 イクロム研修雑感

中村 雅治 13

### 文化庁ニュース

国立美術館所蔵

内外美術名品展の開催について……………17

第6回日本民謡まつりの開催……………17

文化庁企画・提供「美をもとめて」の放送予定……18

### 展覧会

所蔵作品による開館三〇周年記念展Ⅱ

近代日本の美術1945年以前……………21

昭和56年度新収蔵作品展……………22

「近代日本のガラス工芸」展……………23

文化庁月報昭和56年度総目次……………24

文化庁日誌……………27

国語シリーズ⑩ 「手紙の書き方」に関する問題 29

新設法人紹介 (社)日本七宝作家協会 ……………20  
(社)華道瑩心会

国立劇場ニュース 文楽 玉藻前職袂ほか 31



例年ならば今ごろ（七月上旬）山形県下では、朝露に濡れながら黄色い紅花の花を摘み、紅餅作りに汗を流している時期ですが、今年

は天候が不順なのでいかがかと案じられます。一九世紀の中頃、ウィリアム・パーキンによって合成染料が発見、製造されるようになるまで、世界の人々が用いていたのは自然の植物や動物、鉱物から取りだした色素による天然染料でした。天然染料の大部分は植物の根や葉、花、実、樹皮、樹幹に含まれている色素を活用するものでした。その植物は多くの場合山野に自生するものの中から、有用な種類を選択してきましたから、風土によって差違があるのは当然で、それぞれの地域に特色ある染色が生まれたわけです。同じく黄八丈と呼ばれるも、八丈島特産のそれは八丈苧安の黄色々素を主体としているのに対して、秋田八丈は寒冷地の海岸の砂浜に自生するハマナスの根皮から抽出した黄の色素が利用されているのです。

一方、文化の発展や人智の進歩は、自生の植物にたよるだけでなく、材料となる植物を輸入したり、移植したりすることによって、種類をふやしてきました。

我々の祖先が利用してきた植物染料の中でも、特に多くの人々に愛好され、重要な染料

## 随 想

### 日本の染織の技術と心



北 村 哲 郎

（前・文化庁文化財鑑査官）



としてきた紅花と蓼藍は中国から渡来した栽培植物です。

紅花の原産地がどこかということは、はっきりわかりませんが、今世界が注目している中近東のメソポタミアの山間部ではないかといわれています。紅花の種はここからエジプトに渡ってヨーロッパへ、また一方ではインドから中国へ、更に韓国や日本へ渡来してきたのです。わが国へ渡来した時期は、これも明らかではありませんが、七世紀半ばの頃ではないかと考えられています。

紅花はアザミによく似ており、その花は管状の小花が沢山集まって頭花をつくっています。この花に黄と紅の色素が含まれているので、この花を摘んで、水洗いし、水溶性の黄色々素をなるべく除去してから発酵させ、臼で搗いて紅餅を作り乾燥させて、保存をはかるのです。染色をする際にはこの紅餅を灰汁水あるいは炭酸カリウムを加えた水に漬け、紅の色素を溶出します。この染液に絹布を浸し、これに梅酢またはクエン酸を徐々に加えると次第に発色し、美しい紅染が出来上がるわけです。

紅花は布や紙を染める有用な染料ですが、また化粧品品の口紅や頬紅の原料ともされてきました。また種子は油脂原料とされています。紅花によって染められた紅は「万葉集」に「紅はうつろふものぞ、橡の馴れにし衣に猶し

かめやも」とあるように、「うつろふもの」つまり褪めやすい色とされてきました。事実紅は日光堅牢度の低い染料であり、また汗染みが出来たりすると、変色をする難点を持つていました。しかし、それでもなお紅染が古くから現代に至るまで、人々に愛好され存続しつづけてきたのは、第一にはその鮮麗で魅惑的な色の美しさに心引かれた結果であったと思われませんが、第二には紅が人間の血行をよくし、冷えを防ぐ働きをするという医薬的な効能を生活の体験として認めてきたからでもあります。たとえば公家の装束でも単や大口あるいは長袴など肌に接する衣料は、ほとんど紅染と定められてきたのも、また近世になつてからは、長襦袢や蹴出し、あるいは表着の裏地に紅染を好んで用いてきたのも、美しいものを内にひそめるといふ美意識もさることながら、紅が肌を守る、健康を保持する上に役に立つという実利もあつたのと言えます。還暦に赤い頭巾や袖無し羽織、肌着などを贈る風習も、老化する身体の保健という観点から始まつたことと考えられます。

化粧に紅を用いることも、インドのヒンズー教徒の女性が、額に赤い星を入れるビンデイのように、本来は魔除け、お呪いとして始まつたことのように、この風習は中国に伝えられ、唐代には、額に花鈿と呼ばれる四ツ星をつけ、唇の両側には翠鈿という、緑の

一ツ星をつけ、唇には紅をさす貴婦人の化粧法となつたのです。正倉院御物の中の鳥毛立女屏風に描かれている美人にはこの唐風の化粧法がみられますから、奈良時代には日本でもそうした化粧がなされていたものと思われまゝす。額に紅をさすお呪いは嬰兒のお宮参りの際、額に紅で大の字を書いたり、赤い星をつける民俗として、今日でも一部に残っています。口紅は最も普及してきた化粧ですが、これも単に美容上だけでなく、紅に薬用成分が含まれているからでした。もとより誰もが紅の薬効を知つた上で口紅をつけていたわけではありませんが、美を求めながら、自然に保健衛生の道にかなつていたというわけですね。

紅が消毒にも役立つと考えられてきたことは口紅の例でもおわかりと思いますが、出雲地方の生ぶ湯の湯上げにも、それはみられます。生ぶ湯の湯上げは子供が生まれると、嫁の実家から届けられてきたものの由ですが、それは松竹梅に鶴亀の吉祥文様などを簡糊描きで白く染上げた木綿の紺染で、一角を斜め取りに紅染としたところに特色のある幅広の手拭い状のものでした。この紅染の部分で、子供の顔つまり目や口を試つたわけですね。湯上げだけでなく、産着にも昔の人は同じような配慮をしてきました。近世民間では産着を紅や錆金に染め、または麻の葉や井筒などの文様をつける風習がありましたが、これ

らはいずれも魔除けや子供の無事成長を祈る呪いの意味を持つていただけでなく、紅や錆金の医薬的効用を考えてのことでした。錆金も紅と同様日光堅牢度は極めて低く、媒染剤を用いなくとも布に染着する反面、洗濯で色が落ちてしまふ欠点を持っています。にもかかわらず産着をこれで染めたのは、錆金が健胃、消化剤としても用いられてきたからです。つまり錆金の産着は口に入れば、薬になつたからですね。

もう一度紅の話にもどりませんが、紅花の種子に含まれている油脂のリノール酸は、血管中のコレステロールを取り除く働きをもつということから、近年は動脈硬化の予防や治療薬として貴重視されています。なおアメリカにおける紅花の栽培は油脂採取の目的でなされているとのことですね。

紅や藍に限らず天然染料というのは植物が体内に持っている色素を抽出し、その色素をレーキ（水に不溶解の物質）化することによって、初めて染料と呼ばれるものになり得るのであつて、それには永い経験にもとづく技術の累積が必要でした。特に紅や藍の染色技術を確立するには多くの試行錯誤を重ねたことと思われまゝす。

天然の植物染料は美しい色どりを我々に提供してくれると共に、薬効をももたらしたのです。

## 二

無形文化財の指定を受けた染織工芸関係の中で、それを契機に広く一般の人々にも再認識され、仕事盛んになつた一つに細織物があります。結城紬は昔から一部の人々には大変愛好されてきたものでしたが、指定以後は一段と注目されるようになり、更に結城以外の紬にも照明が当てられ、細織物全体が再評価されるに至つたのは、誠に喜ばしいことでした。

紬はもともと出穀繭や質の落ちる玉繭の真綿から紡いだ糸で織つた、いわば廃物利用として出発したものです。したがって、紬は糸の織度もまちまちであり、節もあつたりして美しさより軽くて温く、丈夫な絹織物としての実用性を主眼としてきました。鎌倉時代にそれが商品として、広く流通しはじめたのも、それが質美を本旨とした武家の衣料にふさわしかったからと言えましよう。また江戸時代に更に隆盛となつたのは、寛永五（一六二八）年の法度にもあるように、絹織物の衣服着用を全面的に禁じられた農民でも、名主と農民の女房には紬が許されていたからであり、またそれは、元禄十五（一七〇二）年刊の村鑑に「蚕村にて女の嫁に仕り候細鳴、袴鳴織り申し候、大積り舍百両程も御座あるべく候」とあるように、農村婦女子の大きな現金収入

源となつていたからでもあります。紬が町の機業としてより、地方の養蚕地帯の農山村に発展したのは、そうした理由からでした。

紬は本来自家消費を目的に織られたものでしたが、素朴ではあつても、丁寧に、心をこめて織られてきました。多くの人が紬にひかれるのも、そうした素朴さの中にある、織手の心の温もりを感じるからではないでしょうか。

紬より更に素朴な織物に「くず織」「裂き織」「つづれ織」と称されてきたものがあります。「くず織」は解き糸や機織りの残り糸などを丹念に球にしてつとておいて、それをつないで緯糸にして織つた布のことで、屑糸を活用しているところから、その名があります。絹糸の残りを使つたものは普段帯などにもされましたが、木綿糸や絹糸を交えて織つた布は炬燵掛けや日常の座蒲団などに利用されてきました。

「裂き織」というのは摩切れた衣服の残片などを一センチ程の巾に裂いて、それを緯糸のかわりにして織つた織物です。経には丈夫な本綿糸を用いているので、地厚で丈夫な織物になりますから、山や海での仕事着やその帯あるいは敷物として使われてきました。漁村では古い漁網をほどいてつなぎあわせ、それを緯糸にしたものもありました。

「つづれ織」は最も古い紋織物の技法の綴織

とは同名ですが、全く違う織物で、屑織と同じようなものです。もともと青森県では麻に白か浅葱の裏をつけ、それを麻糸や木綿糸で細かく刺し子にしたものを「つづれ」と呼んでいます。津軽や南部のこぎん、菱刺しなども、本来は布の補強、保温を考えてのことでした。

消費は美德と言われた使い捨ての時代に育つた方々には、屑織りや裂き織りと言つても想像も出来ないことでしょうが、一本の糸も僅かな裂も、とことん利用しながら、そこに新たな美の世界を生み出してきた民衆の智慧を、資源の少ない国の国民としては、時には思い出してみる必要があるのではないのでしょうか。また自然が天然染料を通じていかに多くの恵みを与えてくれたかということも思い返して頂きたいと思ひます。



編集後記

○古代史には、我々の関心を強く引きつける謎の部分が残されていますが、新羅文化について、京都国立博物館の林屋館長に「新羅文化の再認識―根の國を求めて―」の一文をいただき、巻頭を飾ることができました。

○また、前文化庁文化財鑑査官の北村先生から、我が國の染織についての随想をいただきました。天然染料と織物に対する氏の温もりが感じられるようです。

○文化財保存技術は、文化財の保存に欠かせない要素です。イクロム（文化財保存修復国際研究センター）の建造物保存コースに参加した中村氏にその報告をお願いしました。

○ようやく夏らしくなりました。御執筆いただきました方々に御礼を申し上げます。（W）

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL 〇三三六八二二四一（代表）

「文化庁月報」八月号

（通巻第一六七号）

昭和57年8月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富区西五軒町52番地

電話（〇三）六八二二四一（代表）

振替口座 東京 九一六二番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円（送料四五百円）  
年間購読料 二、一六〇円（送料共）